

私の戦争体験

●高円寺北一丁目

西原 豊子

昭和一九年初めごろから空襲が始まり、昭和二〇年になると、東京には毎晩のように空襲警報のサイレンが鳴っていました。そしてB29の襲来です。その数は日を追って多くなり、B29が襲来すると探照灯が夜空を駆け巡り、それを目がけて対空砲火が打ち上げられて、その様子は現在の野外演奏会などで使用されているシンセサイザーに合せて、サーチライトが光っているように幻想的なものではありませんが、ダイナミックな夜空の大イベントのようでした。が、その代償は非常に大きく毎日焼野原は広くなっていきました。

我が家は中央線の線路際からも幹線道路からも少しはずれていたもので、強制立ち退きにもあわなかったので無事でしたが、父は四国へ単身赴任して留守、兄二人は戦地へ、一番下の小学校一年生の妹も、毎晩の空襲におびえさすのも可哀そうということで学童疎開に出していましたから、家には母と娘四人の五人が、死ぬときはどこにいても同じという母の意見で疎開を考えることもなく残っていました。空襲がある度に今日は残ったけど明日はわからないと話し合いながら、毎

日姉は阿佐ヶ谷の陸軍気象部へ、妹は女学校四年生で勤労動員で川崎の工場へ、その下の妹は小学校六年でしたから国民学校へでした。私はというと女学校を卒業したら従軍看護婦になりたかったのですが、体が弱かったので母の大反対に合意、それでは他に従軍できるような仕事はと探していると、栄養士が外地に行けるらしいと話を聞いたので、栄養士になろうと決めたらちょうど都合よく、父の勤めている産業報国会に、産業戦士の栄養管理をする栄養士を養成する栄養学校があるということで、その栄養学校に行くことにしました。

昭和一八年ごろから学徒動員が始まり、昭和一九年にはほとんどの学校の生徒は動員で働いていましたが、一部の特殊な学校だけは動員が免除されていました。私の通学した栄養学校には地方の炭鉱や大きい工場から派遣されてきた年輩の男性や女性が何人かいて、私たちと一緒に勉強していました。が、私たちと共に動員が免除されて、昼間でも防空壕を出たり入ったりしながら勉強していました。

あのすごい大空襲の三月一〇日は、東京では山の手にはほ

とんど被害はありませんでしたが、下町は物凄い被害でした。翌朝私はいつものように学校に行くため家を出たと思いますが、その日は中央線が止まって走っていないだったので、電車が動いていないときは中野駅から新宿まで線路の上を歩きますので、歩いたのではないかと思いますが、その時の記憶がはっきりしません。世田谷区祖師谷大蔵にある学校に行つて、どういう連絡を受けたのかわかりませんが、私の記憶がはっきりしているのは、御徒町の駅を出て見渡す限りの焼野原に立つてからです。私の初めての勤労働員は、被災者のための炊き出しだったのです。指定場所は焼け残った小学校でしたが、見通しが良くなっていたのですぐ見つけることができましたので、行こうと歩き出してまず驚いたことは、焼死者が道端のあちこちに放置されていることでした。

死体の上には何かが被せてありましたが、それは焼け残ったトタン板や、どこかで拾ってきた藁わらのようなものですから、ある人は足がニョッキと出ていたり、ある人は長い髪の毛がでていたり、真赤に焼けただれた皮膚が横から出ていたり、非常に強い刺激を受けましたが、その時は恐しいという気はしませんでした。それ以上に不謹慎と思われるかもしれませんが、米屋さんが家庭に配給するために店に積み上げてあった大豆が焼けたのでしょう。真黒に黒光りするたくさんの真珠の球が、山から裾野に流れるようにまかれていたこと、美しかったこと。食糧難のとき勿体無いと考える前に美しさに見とれていました。

小学校に到着すると兵隊さんが何人かいて、炊き出しをするために運動場に穴を掘り、直径一メートルもある鉄の平釜で飯を炊くためのかまどかまどを作っていました。校舎は木造二階建てでしたが完全に焼け残っていたので、教室は焼け出された被災者で一杯でした。長い廊下の腰板は被災者の伝言板で真白になっていました。それでも足りずに階段、手すりの一本一本にまで書かれていましたが、今考えるとあの中からも何人探し当てられたかと思えます。

ご飯が炊けてからが私たちの仕事です。教室の真中に藁わらを敷いて、その上に塩むすびを並べるのですが、できたての熱いご飯を大きさを揃えてむすぶため、お椀にご飯を入れて軍手をはめた手に移してむすびました。一食分としてどの位ご飯を炊いたのでしょうか。山になる程握りましたが、のし餅を作るような箱に分けて配ると、アツという間になくなりました。一日目は夢中で過ぎましたが翌日は少し余裕もできて、二階の窓から外を眺めていて、またまた驚きました。窓から二、三〇メートル位先だと思えますが、トラックが止まっていて、兵隊さんが五、六人いました。何をしているのかと見ていると、焼死体の回収をしているのです。大人の人は重いので一人が手を持ち、一人が足を持って一、二、三と反動をつけてトラックの荷台に放り上げているのです。

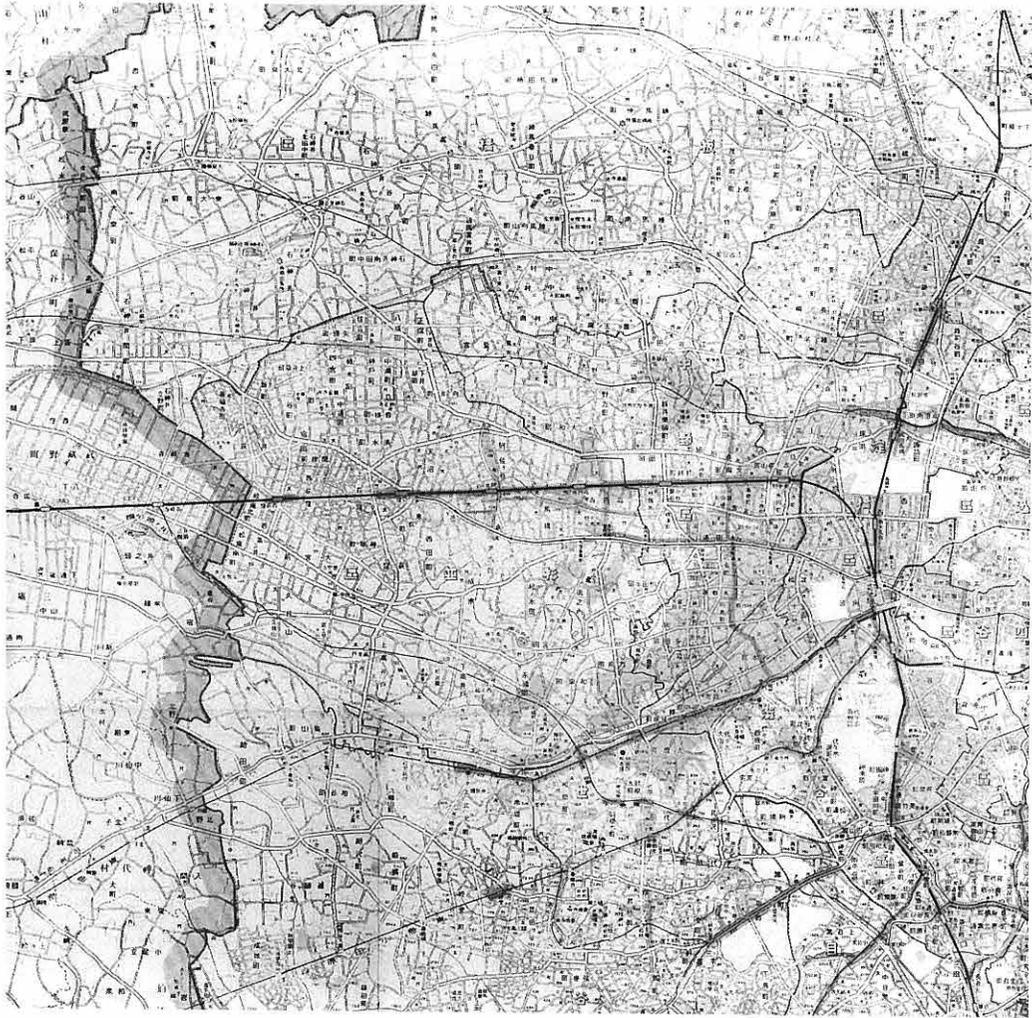
まるで丸太を扱っているようです。子供の死体は焼けて手足がとれていますので、頭を掴んで片手でポイッと放り上げていました。それを一緒に見ていた、知人を探しに来ていた

人が隅田川にも探しに行ったが、川には水ぶくれになった死体が一面に浮いていたと話していましたが、その時はそんな話を聞いても、焼死体を見ても異様な環境の中にと、人間が人間でなく物としか感じられなくなっていたようです。

しかし問題はそれからでした。三月ですから帰りの午後六時過ぎには暗くなっています。中野駅から高円寺に向かって線路沿の通りは人通りもありましたが、横町に入ると街灯もない細い道です。私の後から昼間見た真黒こげになった人が両手を上げて、ピヨコン、ピヨコン歩いてついでくるのです。それまでどこかに隠れていた恐怖心が一度に出たように、恐しくて恐しくて夢中で家まで走りました。走ってかけ込んで来た私に驚いてでて来た母の顔を見てやっと人心地がつかまりました。その後何日位炊き出しに通ったかはつきりしませんが、強烈な刺戟を受けたことは五〇年近く経た現在でも、頭にはつきりこびりついています。

その後、幸せに我が家は被害にも遭わず残りましたが、次兄は戦病死しました。私は戦後も病院の栄養士として定年まで勤めました。





帝都近傍図（杉並区付近）

〈提供 井口金男さん〉

戦中の思い出

●清水三丁目

花岡 きくよ

(明治三八年生まれ)

我が家の主人は職業軍人でした。昭和一二年夏は役所に泊り切りで着替えを取りに帰るだけでした。昭和一六年春より仏領印度に出張し、そのあとどこにいるか不明になりました。広島で原爆に遭い市内の後始末で走りまわり、ひどい原爆症になりました。終戦後呉地方復員局に勤務、昭和二年五月に帰宅しました。赤十字病院で治療を受けておりました。体も悪く戦犯で仕事も出来ず、売り食い生活でした。

子供は昭和五年生まれを頭に六人おり、戦時中は万一の時の覚悟の日々でした。小学生二人は学童疎開でお世話になり、中学生二人は学徒動員で工場通いでした。学校では蝟壺掘りの毎日、軍事教練で家に帰って縁側に上りきれませんでした。母と妹と五歳の娘は清水に疎開しましたが、昭和一九年一二月の大地震で家が倒れ、空襲もあり家も焼かれ、荻窪から二晩位行列して買った切符で弟に届けて貰った品も皆焼かれてしまいました。夜の空襲で逃げる時、五歳の娘がよその人について行ってしまい大さわぎしたそうです。

新聞もラジオも空爆の被害のことは何もいいませんが、我

が家の近くは初めて爆弾の落されたところで、後で見ると環八道路幅一杯になる大きい穴であちこちに落され、それと日本軍の高射砲のタマが屋根に当たると音と防空壕で小さくなっていました。大ぶ被害があつたようで、夕方妙正寺に亡骸を運ぶ行列が続いていました。焼夷弾はバラバラ一杯に落ちて来て、水をふくませた火たたきで消さないと火事になります。空襲の知らせがあると羽目板に水をかけたりしました。一軒に二、三〇発も落ちるので、消し切れないで家を焼いてしまふ。焼夷弾にあたって死んだという話もききました。家の中にも水槽を置き、それも水漏れするし、雨の日は高射砲の破片で屋根が穴だらけで、雨が漏るので畳はグシャグシャ。いちいち靴をぬいで上っていられないので、靴のまま上ったり下りたりしていました。

夜は一切灯を洩らしてはいけなかったので、ガラス戸は黒いカーテンを掛け、電灯は黒い布で包んでいた。昼も夜も煙を出すことは禁じられていたが、煮炊きはどうしていたか思い出せない。おながが空いたということも思い出せない。時々

中学生の子が給食をのこして持って来てくれた。戦争が終わってから皆空腹に悩むようになった。まっ白いごはんをおなか一杯食べたいとか、アンパンが食べたいとか、天どんが食べたいとか、そのようなものが皆手に入り飽食の時代になつてしまつて夢のようだ。戦争中は配給以外は闇値で我が家などは買うことは出来なかつた。駅の通りに闇市があり卵や魚など売つていた。値段は忘れたがイカが二杯一五円という風でびっくりした。食べものもないが煮炊きする炭も薪もなかつたので、本を燃やしたこともある。お隣りでは箆たんすや茶箆たんすを燃やしたとか。朝早くおからを買いに行つたり、道の草を食べた事もある。疎開した人もやつぱり食べるのに苦労したそうで、物を持って行かないと買えなかつたそうだ。着る物にも困つた。若い人たちのズボンには穴があいたり、すり切れるので上から上から継当てるので、重たいほどでした。それに糸もつぎ布もなく継はぎも存分には出来ません。足袋も型紙を買つて家族全員で足袋づくりつくりに励んだ事もあり、下駄まで作りましたが、うまく行きませんでした。

我が家の主人も昭和二五年ごろ職に就き、同二八年には長男も就職して追々生活も整つて来ました。同四〇年には三男四男も結婚して同五〇年に八人の子供が全員結婚独立しました。主人は大変喜んでいましたが、同五一年三月に病氣入院し、肺癌で七月に亡くなりました。七三歳でした。今私は八六歳で長男の隣の家に一人暮らしを楽しんでいます。戦時中は四〇歳位で今の末の子より若かつたのです。

金の應召御國の爲に

金買上げ準備の爲
各戸毎に金所有の
有無を調査致します

七月日金調査

申告は一個も洩れなく正確に

金時計、金指環、金縁眼鏡等
金製品をまた御持ちの方は
今すぐに御賣り下さい

市京東・府京東

金の應召ポスター

〈区立郷土博物館所蔵〉